

甲武境の村・西原に生きて

降矢静夫 俳句集

雪 虫



降矢さんを囲む会

甲武境の村・西原に生きて

降矢静夫 俳句集

雪 虫

降矢さんを囲む会

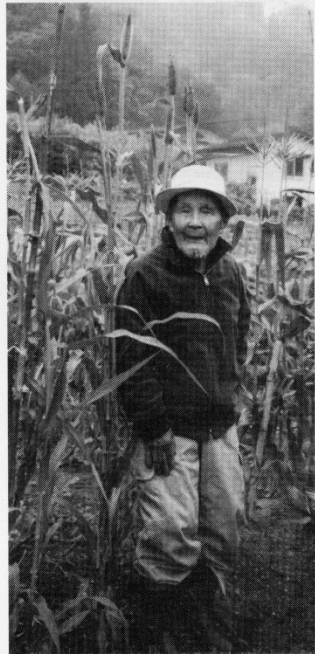




自宅前の竹林で（平成元年5月）



若いときに植えた自慢の桜（平成6年4月）



アワ畑の防鳥網を張るのが一苦労（平成9年10月）

トウジンビエの試作に成功（平成6年8月）



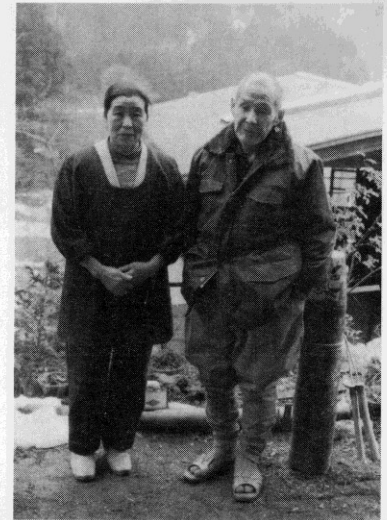
原より下城方面を
望む西原の景觀



八王子市堀之内の鈴木昇さんを訪問（平成7年11月）
小学校前からの畏友中川勇さんと（平成5年5月）



三頭山荘の「寄り合い」研究会に脇坂芳野さんと（昭和63年5月）

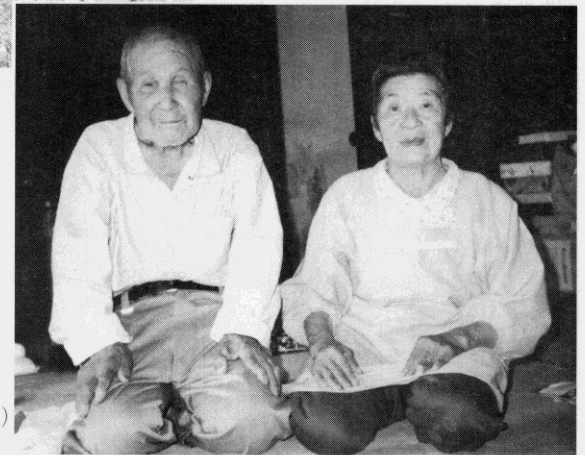


「門男」を背景にこのお夫人と
（昭和56年3月）

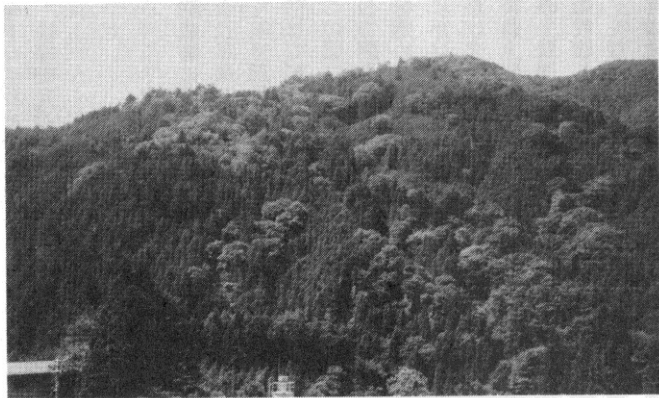


「光岑農夫の象」
笹村草家人 昭和38年制作

農作業はいつも一緒（平成8年9月）



最後になった記念撮影
（平成9年8月）



降矢さんが日々仰ぎみてきた向かいの山

〔表紙〕 降矢静夫近影 平成六年四月
 〔裏表紙〕 笹村草人先生の木彫「二茶」のモデル
 〔カット〕 金子愛々・滝川照子

あとがき	60
付表	49
① 西原のイラストマップ	
② 降矢静夫 略年譜(1)	39
③ 降矢静夫 略年譜(2)	
④ 降矢静夫 農の歳時記	
安孫子昭二 (安孫子昭二宛)	13
一 昭和五十六年(木俣美喜男宛)	6
二 昭和六十二年~六十三年	

降矢静夫写真撰

はじめに

俳句集

書簡撰集

木俣美喜男

— 甲武境の村・西原に生きて —
 降矢静夫 俳句集 「雷」 虫

もくじ



木俣と埋蔵文化財センターの庭園で
 (平成7年11月)



安孫子と道路側の畑で
 (平成元年8月)



金子・滝川と道路側の畑で
 (平成9年8月)



賀曾利隆・中込卓男さんも加わって歓迎会 (平成7年11月)

はじめに

— 雑穀研究の始まりと降矢さんとの出会い —

木俣 美喜男

山梨県上野原町に出かけることになった契機

もう二十五年ほども前のことになります。一九七四年（昭和四十九年）三月に東京教育大学大学院修士課程農学研究科を修了してすぐに、今の勤務先東京学芸大学に就職しました。この頃に前後して、当時遺伝学研究所から京都大学に転動して間もない阪本寧男先生のお誘いの下、雑穀の調査研究を始めました。この年の秋には岩手県から秋田県・新潟県にかけて、松尾芭蕉のごとく師のお供をして雑穀調査に出かけました。その後、秋も深まってから、再び阪本師と山梨県上野原町にでかけました。この時が私にとって、最初の上野原行きでした。

「東京に就職したのなら地元各村々に雑穀調査の研究のフィールドをもつのがよい。ついでには上野原町が良からう」とのご助言に従って、ここを初めての調査研究のフィールドとしたのでした。翌年にかけて、ともに研究をする学生

を募ることにして、自然文化誌研究会を作りました。何のこともない手書きポスターを何枚か作って教室に貼っただけですが、幾日もしない内に一名の男子学生と三名の女子学生が応じてくれました。専攻は三名が理科、一名が音楽でした。こうした研究グループを作って以来、現在までほとんどに多数の学生や友人が上野原町を訪問することになりました。

雑穀研究をここで始めるに至った経緯を遡って思い出すと、次のようなことでした。筆者は学生の頃、静岡大学にいました。同級生が夏休みに遺伝学研究所でアルバイトをしていて、私が求めている師を紹介してくれたのです。それが阪本寧男先生でした。

早速、エチオピア調査から戻ってこられたばかりの師を訪ね、植物調査探検記を大学で話していただきたいとお願いしました。わざわざ三島から静岡に二度もおいでくださり、学生たちに多くのスライドを交えて興味深いお話をしてくれました。それまでコムギの研究を主にしておられた師は、エチオピアでテフという雑穀に出会い、大きな啓示を受けたようです。以来、研究活動の主要な関心を国内外の雑穀栽培に向けてになりました。

師が帰国して、たまたま風邪を引いて、研究室の助手を

していた尾上さんのお父さまがお医者でしたので、その医院に行き、待合い室でパラパラと開いた雑誌『人間医学』に長寿村上野原町の柵原の記事が掲載されていたのです。ここでは多くの雑穀が栽培されて日常の食生活に大いに食されており、健康・長寿の主要因となっているとの記事だったと思います。阪本師が筆者に研究フィールドとして山梨県上野原町を推薦したのは、このような契機でした。

柵原から西原へ、降矢静夫さんとの出会い

自然文化誌研究会は、一九七五年から上野原町で雑穀の栽培とその利用に関する本格的な調査を始めました。当時、この柵原地域に関連した研究は、甲府の医者であった古守豊甫先生が長寿医学・健康医学の視点からなさっておいででした。また、東京学芸大学の民俗学研究会の山梨県小菅村の調査報告書も参考になりました。後に知ったことですが、有名な民俗学者の宮本常一先生も訪ねられたことがあったようです。

筆者らにもっとも大きな影響を与えたのは、中尾佐助先生でした。『農耕文化と栽培植物の起源』に描かれた農耕文化基本複合の考え方に導かれて、調査資料は検討されました。福井勝義先生（現在京都大学）の『焼き畑のむら』

も四国の研究ではありましたが、何度も読みました。その後、佐々木高明先生の照葉樹林文化論に関する多くの著作を参考にしました。

関東山地全体へと調査研究を拡大することにしましたが、中心となる地域は西原と定めました。なぜならば西原には多くの種類の雑穀と、これらを栽培する篤農が大勢おいでになったからです。

民族植物学のフィールド調査研究には、幾つかの大きな楽しみがあります。その一つは求めていた植物に出会う、発見することです。次に、多くのことをご存じの篤農に会えることです。もう一つは農山村の人々の暖かいおもてなしに素直に甘えられることです。さらにつけ加えるなら、山林野の自然に近づけることです。

西原ではアワ、キビ、ヒエ、モロコシおよびシコクビエが栽培されていました。前の四種は筆者も一九七四年秋の東北調査で見ることがありましたが、シコクビエがいかなる植物かは見たことがありませんでした。文献中にはもちろん図もあり、オヒシバに似た植物だと心得てはいました。一九七五年の夏に、ついに西原で移植直後のシコクビエに出会ったのです。それは橋本秀作さんの畑でした。ものすごく興奮して、帰宅後夜半にも関わらず阪本師にお電話し

た記憶があります。その後、幾人かの栽培者をこの周辺に見いだすことができましたが、そのお一人が降矢静夫さんでした。

早速、近所の梅ヶ枝旅館を常宿にして降矢静夫さんを訪ねました。当時は六十歳頃で大変にお元気でしたから、西原で水田も作っておいででした。山村農業についていろいろ教えてほしい旨お願いしました。もちろん親切な受け答えの中で、夏季は農作業に忙しいから雨降りとか冬季なら、お話しに応じようという事でした。まさに自給自足、晴耕雨読の理想的で簡素な暮らしぶりを実践しておられる方でした。降矢さんは、晴天の日はもちろん山畑に出て農作業を行い、雨の日は書籍を読んだり俳句などを作っておいでです。一年の農事サイクルは、付表④「降矢静夫 農の歳時記」のとおりです。

その後、今日に至るまで、何十回となくお訪ねし、親しくお教えを請うことになりました。手紙による交流も途切れることなく続き、いつも文面には俳句、和歌、時には漢詩なども必ず添えられていました。これらは農山村の季節折々の風情を読み込んだものでした。

また一時、著者は降矢さんとの度重なる対談を楽しみに、それを整理して共著で山村生活誌を一冊の本にまとめよう

と考えました。雑穀をめぐる農事のみでなく、山里に降りてくる野生動物のこと、年中行事のこと、個人史におよぶまでお話を伺い、何十分かの録音テープを記録しました。

しかしながら、真に申し訳ないことに筆者が公務に追われるようになったこと、残念ながら無名の筆者では辺境の地の雑穀のことなど取り上げてくれる出版社はなく、未だ見つけることができません。

聞き取り調査の際には、奥様が陪席して下さいさることも多く、何度もお茶を入れて下さいました。門男を見本にいただいたときや、さる高名な彫刻家が降矢さんをモデルに制作された像の写真撮影を依頼された時などには、ご夫妻を ついでに撮らせていただきました。

先頃、その奥様がご他界されたことを聞かされました。お訪ねする約束をしていた矢先の急遽の入院により、訪問が取り消しになり、残念ながらあの優しい奥様の姿に接することはもうなくなりました。

かつて家族でお訪ねしたこともありましたが、毎年娘宛に雑穀のお餅やら農作物やら送っていただきました。多くの調査協力者の中で、降矢さんは二十年を越える親交を維持してきた数少ない方の一人です。

西原以降の雑穀調査

関東山地中部の雑穀調査は七、八年続けて、『季刊人類学』などに調査報告の論文を何編か報告しました。この調査は、都会で生まれ育った著者が日本の環境文化をじっくり観察するトレーニングになり、その後の研究において雑穀をめぐる文化複合を考察する一つの基準を形成することができました。若い当時は海外調査に出る機会になかなか恵まれなかったのですが、海外調査に出かける前に環境文化の比較基準をもつことができたことは、後になって心強い思いを新たにしました。

さらに日本では、北海道における雑穀調査を一九八〇年の前半に行い、ついで関東山地の北部に範囲を広げました。以来今日まで、全国各地を訪ね回っておりますが、西原には折りにふれお訪ねしています。

特筆すべきは、一九九〇年にインドからシタラム博士をお呼びした際に、西原へ降矢さんをお訪ねしたことです。彼はバンガロールにある農科大学に置かれた全インド雑穀改良計画のコーディネーターであるとともに、国際雑穀ネットワークの議長として、既に二回の国際会議を開催しています。一九八五年以来の京都大学インド亜大陸学術調査隊のカウンターパートです。筆者は、一九九六年から九七

年にかけて彼の下で共同研究を進める機会をもちました。

海外調査は一九八三年以来、インド、ネパール、パキスタンをはじめ、中央アジア、中国、北米、ロシア、オーストラリア、タイ、韓国、北欧など二十ヶ国近くで行っております。

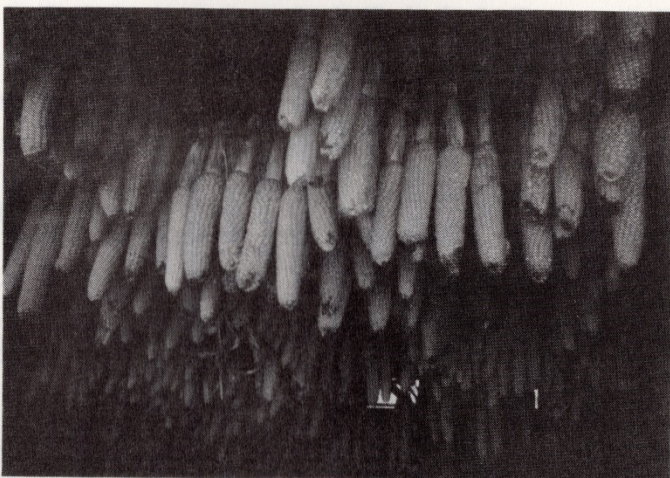
筆者は、引き続き雑穀の起源と伝播の研究を続けながら、こどもたちの未来を考えて農山村の環境文化と環境教育の実践的な研究活動も行っています。山村の伝統的な暮らしぶり、とりわけ雑穀と食文化などの農耕文化複合は、遠い過去から未来を約束するものと確信しています。

西原から始めた雑穀研究会を続けながら、降矢さんと同じように世界中で雑穀栽培を続けているお百姓ともしっかりと友人になりたいと思っています。伝統的な環境文化を大切にしたい簡素な暮らしぶりは、未来人にとっても理想のモデルを提供していると思います。

(東京学芸大学環境実践教育施設)

俳句集

雪 虫 (昭和五十一年〜平成十年)



酒まんじゅう屋さんの硬種トウモロコシ

昭和五十一（一九七六）年

過疎の里冬川瀬の音絶もせず

山眠り窪み窪みの雪光る

雪となり小鳥こつこつ板びさし

背なの子に風呂敷かぶせて霰なり

屋根はいだ風に首だす山羊の小屋

杉売りて山寂寥の冬日かな

つれなさよ雪になりたる農の葬

木々の影春になる陽のまだ厳し

さとの川よどみは氷って寒明る

山眠る妻が先なり半纏着

冬樹の枝打ち鉈は枝打つ

背のびしつすくすく伸びて杉木立

鶴蔭の荒畑草枯れ頬白とのなく

空洞木撲けば響きし冬の山

目ざし売り風花背中に凍る道

生活の疲れ黙して寝る夜寒

かたかたとさや鉈鳴し山か下る

刈干柴刈りされど蜂の威は弱かし

昭和五十二（1977）年

野は荒涼鳥喰柿薄日して

梅の風日脚ののびの頼母しき

みそさざい仕事の合図の如く鳴く

あくびして背のびする猫と雨の私

咲きのぼる葵の花の炎天下

稗ぬきを終えて山の子昼寝かな

楚々として雨にも耐えて今日の萩

立冬のおだやか日和麦時きて

短日や干葉あむ手へ日もあんで

昭和五十三（1978）年

松とれて侘しき妻との生活かな

竹林の竹伐る音や山眠る

春泥や馬蹄ぼくぼく小径かな

雪の間へ紅梅あかむ春ごころ

降れば読む晴れば耕す冥加かな

夏草や若蟬縫って朝の露

忽然と焰の如く曼珠沙華

馬祀る碑の時雨たり山の村

昭和五十四（1979）年

きんとん

舳斗雲の如き雲浮く春の空

寒梅やひそかに花あり旧元旦

紅梅の花のふるえや余寒来ぬ

みそさざい早春の譜郷へ告ぐ

早春や吾へといえる黒砂糖

菜の花や石の地蔵も眠そうな

御神木の伐られて若葉の空ひろし

桜散りてかじか鳴く水田に入れる

万緑や昼寝の日課水うまし

せがきえい

戻り梅雨ポコポコ木魚の施餓鬼会

夕立や稗抜き終えて昼寝よし

雨の日や茶の間一つぞわが砦

夏去りぬ白露置きたり萩の花

日を重ね秋雨降りて蕎麦の花

盆栽の乾く小春日妻は留守

冬立ちて吾子は母へ似妻へも似て



昭和五十五(1980)年

春ごころ茶の実からから山の畑

松明けて一輪一輪寒梅が

着ぶくれて猶ちじみ込む寒の空

日の延べや町から運ぶ砂利車

今朝の雪木へだけ積り降っている

赤蛙騒ぎ出したる峡の川

梅の風山並遙か日のあかし

花冷えや咳かせつらし葱坊主

默然と桑の細枝の尺取り虫

秋桜のなおやかな花ゆれて晴れ

好日やほのぼのいたたくしめじ汁

古都不知ず古都の味知る冬である

山へ雪そろそろくるか秋の虫



こあがって
蚕上簇暑くなる山の桜ン坊

遅れ梅雨あじさい咲きて繭出荷

紫蘇もめる香がする昼の雨の音

夏冷え鎌研ぐ山の杉木立

稲の穂のようやく見えて冷夏ゆく

はかなきや夜空の夢の流れ星

狐よけ針金張ってとうもろこし

妻眠る蚕上る夕べ栗落ちぬ

新涼や葬送の日の秋海棠

昭和五十六(1981)年

ことなげに温水器調べさすはつ日

死せる者生きいる者も雪の道

物忘れ重ねる老へ寒の風

義歯入れて街の雑踏春遠し

梅咲いて猫が背のびす日の溜り

雪おおう石に躓く寒さかな
つまず

春の雪山なみ白く遙かなり

戻来如月之歌

萌兆展開如月空

香雪麗黄鳥

讚清太薯

驚声朗々春鶴蔭 薯古来窮乏救援
終日斜面段畑耕 噫中井徳不朽輝

桜花頭

養花一年丹精盡 花開旬日命知誰
春来咲花年々変 境再若還春惜

新梢へ郭公鳴きて山の麦

新梢やだんだん育つ桜ン坊

母の忌や新薯供え新茶そえ

朝顔や老て耕す屋の庭に

懶雲ほどなく秋の夏木立
ものういも

熟年の秋ほのぼのとこのつどい

秋鶴水

鶴水清澄天如鐘 流揺紅葉浮蜿蜒
山寺鐘滔々流送 鶴蔭秋映及相州

ガサゴソと大きな朴の葉が落る

短日の落日小豆打ち終る

昭和五十七(1982)年

干支六度巡りきたれる日を拝す

黄梅のひと花みつけ春ちかむ

お堀なる鯉の魚紋や水ぬるむ

沈丁花新宮殿へのぼる坂

武蔵野の茫漠家並み果てしなく

鷓鴣鳴く暮がたに桜散る
みせうこ

ほろ酔いに花はらはらとたそがれる

若葉風藤の花ぶさ揺れつつく

茶摘みの青葉の眩し日は照って

あじさいの梅雨の終わりの雨である

蚕上りやまなこくぼみつ髯ののび

濁流も事なし蟬は鳴きつつけ



奥郡内柿の実赤くかがやかす

月代に似るはげこみやわれの秋
さかやき

稗の穂の収穫する手に実のこぼれ

生き残る稗に網張る暑さかな

昭和五十八（1983）年

奥郡内霧の中より年あける

年頭譜

快し麦飯と葱味噌汁

日日南面に陽を楽しむ可く

年を迎え三恩に只感謝す

鶴蔭の小盆地で安住す

土竜（もぐら）

冬枯れや何処へ出るのも峠あり

梅からの花信にふれた奥郡内

雪ふれば隣も遠し奥郡内

しとしとと春になる雨土へしみ

咲けば散る花を追ってる蝶である

花の雨春眠さめず雨しきり

荒梅雨の明けて炎帝威を弄す

草きずにしみる夕べの風吹きぬ

短日の足より冷えて干葉あみ

昭和五十九（1984）年

霧うまる奥郡内年明けそめし

みんなきよめる雪がふり年あける

かた眼いれ蚕えのねがい達磨かな

昭和六十（1985）年

山居して稗がゆ啜る雪こんこ

大かがびの如き山なみはつ日いず

春凍る桜さけずして黙想と

春立ちて根雪の山へ雨けぶる

蚕上りを初栗めしも奢りなり

虻に夢破られる午木影かな

菊さけど女おどしの日もありぬ

さいはら

しぐれけり冬めく鶴蔭柿あまし

昭和六十一（1986）年

新雪のあかく眼にしむ初日かけ

鶴蔭も雪どっさりとかぶりたり

さくらいま駄々こねやっといま咲きいでり

かたくりも春と別れてしぼみたり



万緑や忙々せうせうとわれほととぎす

蚊を追って団扇ものうし手のだるな

いたどりの花のこぼれや冷し麵

山村に棲すまいてやっわれもと吾亦紅

茶の花やしみじみ秋の日向なり

焼酎を草疵うづきぬる今宵

雪虫の母のまつこどもそばをとぶ



雪虫

菊の香や初鮭うれし山居かな

落葉ふむ冬のあし音カサコソと

栃餅や山家吹雪いて炉端かな

昭和六十三(1988)年

かべに掛く黍のたね穂へ初日さし

小寒や石の地藏尊さむそうな

雪ならば壁の種穂へ鳥が来る

春寒し爆撃忌さし世のさかえ

花までと奥郡内は雪である

昭和六十二(1987)年

かぎろびの谿々そめしはつ日いづ

凜然と紅梅花もつ寒明けり

露のとう摘むのも奢り山居なり

ほどよけるしめりもたらすめぐみ雨

六月は白い花のみ多く咲く

父の日の父老いたればじじの日か

万緑のいよいよふかしほととぎす

夏の日のコビリは薯と稗の餅

初雁が小豆はんでるたそがれる

葉ざくらやつばめの来る日となっていて

行く春へ雉鳴くなり人恋し

万緑の雨にいき付くあか牡丹

雨ありて四国裨濡れつ夏至であり

さみだれの雨間若ものの葬ありて

炎天下もどれば井戸へすがる水

むろがやの都留のもろこし穂いでにけり

こおろぎや祭りの留守居黙念と

山霧がたれて雨来る暑消ゆ

黍のたれ穂ほのぼの手にし秋に入る

酒肴板野の里のよい祭

金一封これはこれはと背をかかめ

なが雨や粟穂うなだれ老にけり

木枯しの粟穂ゆすぶる秋なかば

菊す枯れ峠へ雪来て野はむなし

昭和六十四・平成元（1989）年

海こえし稗のすこやかいのる歳

雪ふらずとはいうものの冬である

立春の日さしの紅梅はじらいて

花の雨黙然ひと日家居かな

葱坊主ならんだとなり南瓜うえ

鎌倉のみやげ甘し青葉あめ

六月は白の花心にも咲く

さみだれのやもうともせず薯病める

花栗や心もむなし雨つづく

どくだみや梅雨の晴れ間を釈然と

沙羅散って炎暑の夏来たりける

喘ぎつつ小豆蒔ける合歡の花

山百合や土用出水の山の村

蛩飛ぶ鶴川ダムの噂たつ

ゴキーンと玉蜀黍をかいて籠

滔々と鶴水流る夏終る

名月の真近となりぬ露白し

草刈らばあまた野良着へ草の実は

こおろぎや夏もあつたらういまの老

ハラハラと落葉す山草刈て

しぐれけり杖つき歩く落葉みち

星食った二日の月は細かりし

平成二（1990）年

山河春曆日むなし山居かな

如月の西原山地雪尺余

冬眠の吾もはい出ぬ春一番

残雪の坂道怖しするするり

縄文の雑穀つくり後の世人

牛鳴いて桜咲たり川はさみ

片栗や友の来ぬ間に花萎む

若葉風友へすすめる黍の餅

行く春や苺もきたる露の葉に

郭公よ里芋の芽が生えてきし

ジャガ薯花咲く畑に更衣して

花栗や四国稗植ゆ夏至暑し

花栗の終わりとなりて半夏生いすこきし

みちのくの紅花今日都留で咲き

日ぐらしや入道雲の湧く夕べ

炎天に南瓜もぎたり手へ重し

暑ければ暑しとグチす土用照り

こおろぎの鳴く夜となりぬ山家かな

石佛も和む安曇野稲の秋

秋日和大鍋かこむ芋煮会

茶の花やあれこれ想う山の畑

柚の香や日向嬉しく冬である

短日の霜の谿々霜きれず



平成三（1991）年

むろがやの奥郡内も初光り

点滴の水滴見入りまた今日も

春の雀鹿の子模様に畑へふり

桜咲くとはいうもののさりながめ

若葉かぜ眼しむ光街へ行く

若葉かぜジャガ薯の芽生えにけり

卯の花の病む眼へ淡く映じたり

万緑へさんさんそそぐ日の光り

紫陽花や傘さす女の顔みえず

郷愁や桑の実熟す桑を見し

長生きし眼を病む病棟夏木立

花蕎麦のすがし花咲く遺跡園

療友の去り又去り七月へ

刈干やえっちらおっちら来ては刈る

木枯や里芋埋め山の楯

時雨るや菊も素枯て山家かな

小春日や友がおくりしシクラメン

初雪の干葉あめる軒に舞う

平成四(1992)年

とし明けぬ出水の流木へ日がさして
悪しきこと申の年なり福が来る

仰山な雪ふり積る奥郡内

紅梅やはずかしそうなうつつむいて

背をのばし南枝に咲ける梅を折り

彼岸雪展墓もできず雪つつく

春たけてなずな花咲く畑の道

初つばめジャガが生えたり産毛の芽

若竹や日長の空へ潑刺と

山茶花や白菜の押し重くして

平成5(1993)年

若水でそば茶いただく冥加かな

雪もなく奥郡内は山眠る

猪熊の騒ぎ談義で雪となり

奥郡内ちらほらと梅が日がのびて

花かげや嫁ぎゆく吾子を整然と

あかまけ

彼岸ゆき関伽桶のみずつめたかり

花冷えやジャガの發芽を待ちかねて

松蟬や更衣で忙し女房どの

花栗やつゆ空つづくほととぎす

梅雨つづく奥群内は霧のなか

山裾の山百合咲きて香りきぬ

いたどり

虎杖の花のこぼれや蕎麦をまく

ぼつねんと孤独の秋や吾亦紅

菊の香や野焼きの陶の展を祝ぐ

茶の花へ蜂生きていて日ざしかな

冬めきてあかぎれ膏を求めけり

短日を着ぶくれの我が影とゆき

山裾や迎えし友とカタクリと

春の嵐散るも咲けるもあわただし

山吹や山裾の屋へ咲きたけり

霜の夜や狐鳴くなり肌さむし

のらぼうのとうたち蝶のもつれかな

つばくろの来た日うれしく南瓜うえ

柿若葉寺の鐘なり友の葬

苺採りむぎわら帽へ摘んでいれ

馬鈴薯の花咲きそめてみなづきへ

あじさいや病んだ日のみよみがえり

花栗や雨間急ぎ薯を掘る

深梅雨や友の送りし桜ン坊

らっきょう

薤を掘りたる雨間つゆ知らず

ほうづきのまだ青くして夏若き

山の百合匂い漂う霧の里

秋海棠霧のこぼれて眠ざむ朝

立秋やトウジンビエは出穂して

夕蟬の送り火たける軒で鳴く

嵐過ぎ空の青さよ吾亦紅

祭り過ぎこおろぎ鳴きぬ夜となりて

カタクリや乙女のリボンふと想う

うららかに山の桜へ友在りて

ふじ咲きぬ相州武甲の山若葉

若葉風連休明けやふじつ々じ

卯の花やジャガイも掘りて母の忌へ

炎天下トウジンビエの穂なみかな

こおろぎの鳴く夜となりぬ風涼し

忽然と曼珠沙華やわが庭へ

こおろぎの土間へ来て鳴く雨の宵

秋雨や秋海棠の余滴かな

柚味噌のほのぼのと友のあり

平成六（1994）年

八十越えて四度の初日拝しける

天の意とトウジンビエのみのり手に

松とれてさむさひしひし山の村

成人の日祝きうららかに吾子ありて

雪の日や音なく声なし山家かな

寒中に見舞いと友はお魚を

寒明けて裏へ日脚のそっとさし

咲く菊やあめでなやめるひと日かな

蠅螂の葉枯れて草へ縊りつく

銀製の時計腕にし秋ふかし

冬耕や師走の空は冴えわたり



平成七(1995)年

としあらた翁とよばれし賀状かな
かんのいり仔をもつ犬がよく吠える
ほうかむりききらきのかぜのじいぶく

小正月丸木の顔の門男

雛だんの蛤なきぬ雪つもる

砂糖湯もほっと余寒の咳ぐすり

菜の花やともかくうらうらかな

春雷やアリもわたしも慌てけり

鯉のぼり萌芽の風や山の村

鶴水やまつりの灯うかべ蜿蜒と

菊の香や庭で粟打つ日和かな

菊の花おののきたりぬ今朝の霜

雪虫を土大根で追う日かな

みじか日の入日の山は裸木して

霜柱踏めば足への冬の感触

着ぶくれてみじか日入日を惜しみけり

着ぶかれて日向の落葉乾くおと

年はゆく雪なき山はむなしけり

新茶の香ほのぼのと立夏かな

牡丹咲くとはいうものの逝ける人
つばくろや雑穀の苗が芽ぶきけり
つゆ空のやんではふりて鋤おもし

みなづきや山の畑のジャガの花

花栗やしとしと雨は人恋し

夏菊がうだつのあがらぬわが庭に

終戦忌南瓜の蔓は茂りけり

秋の雨秋海棠もすがりけり

秋の雨ともかく家に帰りけり

平成八(1996)年

杖つきて山の端へ出る初日みん

犬ごやの白くなりたる春の雪

立春やヤット探した落のとう

如月や砲煙のごと砂あらし

雪雪でかまくらのごと犬のこや

雪どけの雫やねよりひねもすを

畑のみち春が来ている落の蔓

またの雪欠伸かみしめ刻すう

ぬぐ冬着今朝は又着る山は曇り

過ぎしこと問われるつらさ老いの身は

キャベツ枯れなずな咲く畑となり

都留のさと陸下むかえし桜爛漫

桜爛漫陸下迎えしみよ米え

きじは鳴いて萌黄の山の夏近し

黍播て春の名残りの桐の花

救い雨いとしくもろこし今日は植え

つんつんと小麦穂を出し若葉風

つばめのご巢へ戻るか明日も又

どくだみの花咲く径や友恋し

初霜の黍粟がらへ薄すらと

秋しぐれ炬燵で猪の話など

今年こそ今年こそとて年終る

平成九（1997）年

恙なく初日拝して老の倅

門松の松伐る門へ孫も来し

雪ごもり干魚かみしめ友恋し

鯉のぼり尾をふるごとく青葉風

雨なれど友の恵や桜ン坊

海の日も山のはたけでジャガを掘る

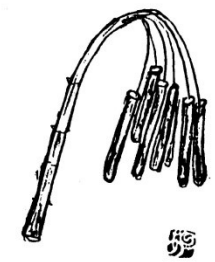
ますかろと知らねで作りしとうもろこし

背のびしてどうかこうかと黍へ網

帽子の色あせて秋に入る

芋月の雨後の夜半皓皓と

山は霧裾への畑で蕎麦を刈る



茎立ちし慈姑くわいの今日は花咲けり

慈姑咲く暑さ戻りし八月の空

素枯れたる慈姑侘しく鎌を砥ぐ

芋月の雨後の夜半皓皓と

頬冠り腰をかがめて落葉掃く

雪虫やかこい大根埋めけり

山茶花の朱を落しいり日を惜む

世にうとしいつか師走か疼く腰

はや冬至ゆず風呂の香へ身を浸し

あれこれと思うばかりで年はゆく

平成十(1998)年

明暗を重く米寿迎えけり

雪もなく親山小山とし明る

むっくりと親山小山かむろ雲

着ぶくれて雪の砦をめぐりけり

冬ごもり雪で砦をめぐらして

節分や友のめぐみし魚かな

残雪の凍りてピッケルほしき径

雪掃いて犬と語りて雪ばれや

残雪へ春呼ぶ雨が今日はふる

親山も小山の木木も芽ぶきけり

葉ざくらや妻の葬すみたそがれる

牡丹だよとはいいつつも風さつき



書簡撰集

一 昭和五十六年

二 昭和六十二〜六十二年

(木俣美樹男宛)

(安孫子昭二宛)

降矢さんの便りから (1)

昭和五十六年一月一日

ことなげに 温水器調べ さすはつ日

一月十三日

寒中お見舞い申し上げます。お嬢さんの近影楽しく拝見しました。家では孫が男児二人外孫で女が一人だけで、ほんとうに可愛らしく思います。

論文の成果、ご期待致しています。

峇子(注:降矢さんの俳句の雅号は光峇で、峇は嶺)近年稀の寒に降参で、日中だけ働いています。冬は年余りと冬眠さながらですね。七十才を越えましたら寒に弱くなりました。二三日薄日で今日は正午四度、朝は戸内で〇。三度、戸外は〇。一度位でしょう。二日の雪が北面は根雪で残っています。

半より町の齒科へ通うのですが、寒さで閉口です。炬燵で時間が余るので、七十の手習で、今になり短冊色紙の練習する日もあり。句は色紙には厄介で漢詩の方がむくよう

で、生まれてはじめて漢詩の試作です。大笑いです。

溪声脈脈山容麗 村落点散西原郷。

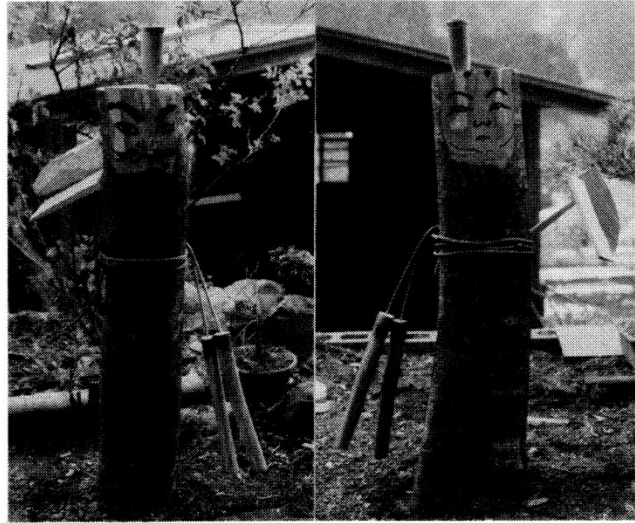
十四日より小正月です。

死せる者 生きてる者も 雪の道

二月一日

学研の成果を期待しています。御疲労したことでせう。一月二十センチの積雪以来、晴天つづきで例年になく寒は強かった。毎日仕事と運動を兼ね、日中は南面の日向に日を楽しむ。お正月過ぎになると寒さで訪問者もなく、老夫婦はまるでむじなの如き生活です。日没後から就床まで時間が長いので、読む書きと今度は頭の運動です。

二月はお出掛けくださる予定の由ですが、お待ちしています。但しまだ寒いです。その節、写真を一枚撮って戴きたいのですが、小正月に造った門男です。老人になったので、材料のヌルデの木を山奥に伐りに行けそうにありません。造る手間はかかりませんが、材料伐が楽でなく、今年は一男が帰省中に伐ってくれました。記念ですね。



寒波に日本列島がつつまれ驚きました。雪、吹雪、又雪と外出は嫌で、冬眠そのものでした。三日よりやわらぎほっとしました。夜より雨になり、四日も終日霧と霧雨です。……。平年は十日過ぎになればぼつぼつ畑作業ですが、本年は少し遅れそうです。然し予報では桜前線は例年より二三日は早く進むといふ。春が突如と来て忙しいかも知れません。……。

雪おおう 石に踏く 寒かな (二日の句です)

うめ咲いて 猫が背のびす 日の溜まり

三月四日 突然の猛寒波どうやら去って、この雨が春を呼びそうです。

三月十一日

昨かの時に 春は枝頭に在りて既に十分

今日十日、日中バスで町への途中、そんな詩どころが

満ちました

今度ばかりに有難う存じました。岩子が長年探していた幻のマンノ御礼申し上げます。いつも御歓待できず、申訳

御入来の節は同伴の方があっても二名位にしてください。寒い時は困るんです。乾燥しているから咳かせが長びきます。

今日は七時頃より雪、小雪に終りそうです。御一報迄

物忘れ かさねる老いへ 寒の風

二月十三日

学位論文、目出たく通過の由、永年の研磨御努力成果と御祝申し上げます。

冬は年の余りと南面に日を楽しむ生活を続けていました。雪も無く天気つきで仕事と運動を兼ねずこし働いていますが、年々体力の減退にやはり年齢を感じます。特に歯が弱り、一月より歯科医通いです。……。十四日は三番目の姉の葬式で、八十八才です。

三月四日

過日は御忙しい中をお越しくだされ御礼申し上げます。久しぶりなので、何を語ればよかったか、判りませんでした。お詫申します。

あれから陽気もゆるみ出したと思ったら、真冬より寒い

ありません。

浮世のつとめか、ここ酒吞が来世して閉口です。……。桐原では仕事が始まっています。残寒が強いので帰宅して鉢の植替えです。降るとゆっくり時でも作ります。心の豊かさがあればここ西原で満足していられますね。今度は「とろしば」を、知らぬようでしたら教えます。今夏は採って粉にして試食してみる予定です。

春の雪 山なみ白く 遙かなり (十日朝の句)

三月二十日

御返信御礼します。十五日は春一番で、五月の陽気でした。この日は火事で、飯尾で四戸全焼、葬儀、結婚式等がありました。妻は子供の処に泊りにやりましたので、三日ほど独居です。盆栽の鉢替ですが、今日は半日畑仕事をはじめました。明日は又町の歯科です。暇のような何か落ちつけない近頃です。

原始人の血が残っていて寒から解放されると、血が騒ぐのかもしれない。平年は彼岸に時無大根、小蕪、人参を作りはじめます。続いて馬鈴薯で、趣味に接木もはじめます。ですから桜の花見は農人には無用です。……。

盆梅が咲き出しました。寒波で寒に弱い者は沢山枯らしました。十九日みそさざいも訪れ、春一報です。

如月之歌

萌兆展開如月空 香雪麗黄鳥戻来

漢詩の作った事の無いのに掟も知らず、今年は少し作りました。……………そろそろ畑仕事で終りです。それでは御健斗をお祈りします。

敬具

四月二日

春望の折花も戸惑う氣候で、菜種つゆと云うか、三十一日は終日雪で地上には積らず、一日午後より雨、二日午前中は雨。

古都の春はいかがでしたか。晴耕雨読とはいえ、視力も老いて読ことも根気なく、正月から折々漢詩を作るが是もその道の教えを受けぬから光容流です。薯作りで、昔当地方に薯を普及せる恩人中井清太夫代官を思ひ出しました。

讚清太薯(せいだんぼ)

鶯声朗々春鶴蔭

終日斜面段畑耕

薯古来窮乏救援

噫中井徳不朽輝

桜花頭

養花一年丹精盡

花開旬日命知誰

春来咲花年々変

老境再若還春惜

五月十七日

若葉が青くなりました。山菜もほうけてきました。

「健斗の程何よりと賀上ます。」

岑子も元氣を出し、粟・黍・四国ヒエを作りました。四国ヒエはじめて直時を致しました。苗から移植は手不足で不可能なので、今、穂モロコシの種を入手したのが残っています。種継に少し蒔たく。日曜日はいろいろの催しで休業になり、弱ります。農人は雨天が日曜ですから。

田植え予定は六月十五日頃で、蚕は五月二十五日頃で、茶摘が末日から六月一、二頃の予定です。

……………近くに書店がありましたら、角川書店の小辞典「日本漢詩鑑賞辞典」を入手できましたら立替で求めて下さいませんか。

新梢へ 郭公鳴きて 山の麦

晴れると忙しいですが、今日も炬燵で怠けています。早稲田大だの、医療団・政治家・みな信じられない時代で、四月から公定料金も上り、つぶやいたでははじまりません。盆栽の早生梅が今日咲き出しました。退屈のまま、近況です。

いづれ又

税額や 葱坊主だまって ならんでる (旧い私の句)

五月三日

八十八夜が過ぎて夏という事です。是からが稲、雑穀の時期になります。若葉が美しい季節です。深流でカジカが鳴き、雉が草山で鳴く、みんな夏の気配でせう。

水稲四月二十七日播種、粟も近日作り度、次が黍です。

四国ヒエはまだ作ろうか、止めようか決心つきません。蕎麦も今日三日作りました。また二三年休んだ雑穀に穂もろこしがあり、種子を貰ったばかりです。人不足なのにさまざま作ると更に大変ですからね、咳風を引き苦しんでいます。矢張り、老人になったという事であろう。

お暇を見て、筍でも喰べにお越しください。近況まで

六月七日

御勇健で御活躍と存じます。

十二日の田植えでも終わりましたらお出掛けください。

拙宅も仕事の関係で少し田植えを早めます。然し苗が小さいです。蚕が三十一日来ました。お茶を三十日に、只今コンニャクの柴かけです。

二十三日軽い夕立が来はじめました。低温と乾燥がやわらぐでせう。低温で作柄は悪く、凶作のような気がします。さつまいもの苗ありましたら、品種は何でもよいですから二十本程お恵みください。希望は紅小町、これは山園にはむかないでせうが。私の苗床は、あまり少量で世話をしませんでしたから失敗しました。

今日七日、町で盆栽の即売会(さつき祭り)にすこし出荷。

ともかく六月は一年を通じ最も忙しい。珍しく里まで郭公が来て鳴きます。はじめてで何かの前兆か?

白い花の咲く季節です。アカシヤ、みずくサ、山ボウシ、さては卵の花、それにユズミカン。山は白い花のみが新緑に交え眼につきます。筍も竹になりました。

新梢や だんだんそだつ 桜ン坊

六月十九日

一杯の日課の中をわざわざ御持参下されましたさつま薯苗、あの日の夕方、植付け致しました。低温の土地ですから良質のものは出来ませんが、矢張り楽しみです。農人ではないれば味わえない期待です。

後旬日は養蚕で精一杯です。購入して戴いた詩集辞典も読んでいられません。六月詩は完全ではありませんが、

新緑深山幽谷鬱 郭公麦秋告眞近
雨止薯花咲段畑 旬日蚕児忙給葉

何をやってみるも大変なことで、いつまで続く根気が？
です。十九日雨急に降りだし寸暇あり 御礼迄いずれ改めて

母の忌や 新薯供え 新茶そえ (母の忌は十八日也)

七月十一日

急に暑くなりました。休暇前で御忙しいご様子ですね。

先般は藪の苗有難う御座いました。蚕の上簇終るかといふ頃より、隣組に重ねて葬式をいたし、繭の出荷に苦勞しました。七月盆ですから弱りました。

僅かに作りました小麦の取り入れです。平年より低温か、半月位遅れていますが熟れ過ぎていません。黍も粟も雑草で一杯です。十一、十二日が盆踊りです。この暑さで遅れた作物も遅れをとり戻すでしょう。……。

農繁期を雨と葬式で疲れきりました。老人には過激すぎました。暑さと疲れでヘトヘトです。弱い人は間引かれます。きつと病人も増え、葬式も亦あるでせう。

皆様にはくれぐれも御健康に留意され度 づれや



八月六日

……………、六七月の無理から体を少し疲労度を越し過ぎましたので、初秋蚕はやめました。ですから八月二十五日頃迄は暇があります。晩秋蚕は八月十六七日頃からです。水稲は例年より一週間以上遅れたやうです。雑穀も亦同じで凶作型の気がします。日曜日はいろいろと私自身でなく周囲の巻添えを受けますので、日曜日外にお出掛け下さい。黍は穂が出ました。天気なら作柄も見てください。三十六年前、原爆が広島に落ちた頃は大分の航空隊に立勤でした。全く歳月の流れは早い。

朝顔や 老て耕す 屋の庭に

六日、奥千丈ヶ原に初霜の由、一寸寒を感じる朝です。

八月二十三日

懶雲や ほどなく秋の 夏木立

あれから子供が帰省し、山の植林地に下刈りに連れ立って行きました。帰るもの来るもので入替えてした。親子の対話も加えての労働で楽しいものです。父に替り世に出る

事を願っている次第です。

山も秋草が咲きはじめました。懶雲(ものういぐも)の流れ、その折りの句感でした。

二十一日からは又静かな二人暮しです。二十六日頃は飼育所から(二十日振りの)蚕が来ます。

畑仕事は残っているが中止で、山へ下刈にでしたので、漬菜や大根をこれからです。

何年振りかの出水でした、風は弱かった。作物も倒伏したものの発芽したものはたたかれ、被害も多少はあります。水稲七分出穂粟五分四国ビエは出穂はじめた処。九月十日迄に穂揃すれば凶作にはなりません。あれから高温でした。

昨日より硯を出して手習いです。書道辞典でも探したくなりました。

九月二十五日

日本列島半分は低温で秋が早いとの予報弱ります。豊作は望めませんが、並作か八分作あればと思います。

上簇期から低温半月で、晩秋蚕も不作です。蚕が上簇し、繭は二十八日頃出荷。秋祭り済み、収穫に入る前です。

異常気象に一番弱いのは農ですから、然し米国は豊作の

年であるという。北海道から東北が特に悪いらしいですね。二十五日雨になり家居です。昨日は十年振りの同級会で、生存者は半分を缺けました。生存者の三分の二出席でした。次回は五年か二年でと約しました。七十才の姿です。これから八十・九十才迄に何人残るか。戦争といふことでも戦死したが病死の方が多い、七十三才の平均にあてはまらない。若い頃から弱かった私が残っているから妙なものです。

熟年の 秋ほのぼのと この宴

十月三日

台風一過、好天気、何日続くことか。……………。

九月は行事の多い月で、秋祭りや彼岸など、二十四日十年振りで同級会を催しました。七十、七十一才で誰もが白頭です。独身になった者が多く、何より気の毒です。夫婦揃って孫があれば、全く幸福といふことです。

北海道の不作は私共にも関係があります。来春購入の薯種は品不足だといふ。粟は寒地は適しないかも知らず、暖地がいいのかも知れず。西原より東の柵原の方がよく、更に昔は相州や肥後粟がきました。キビ・ヒエの方が寒地にはいいのでせう。キビより先に作った粟まだ実が入らず、

只今雀が群団で来て弱りました。キビの缺点是連作ができませんで、五〜七年間隔です。

九月二十八日籾出荷終了。低温で四五日遅れ、不成績でした。水稲は取上げられます。乾草乾柴刈りも忙しく、お見舞いかね あれこれを。

明峯氏も藤野周辺ならば西原より条件がよいでせう。西原は五百〜六百米の海拔で日照時間が短いですからね。隠居生活の趣味ならいいが、将来ある人達が農に生きるとしても無理です。

今月四日か、西原でも北海道旅行に行きます。十月は旅行が何組かあります。客子は黙々と乾草刈りです。半頃妻を永年の労に報じ、山の湯にでも湯治に行かせます。客子には句があり、詩がある。それでいいと思います。農も亦趣味の一つですから……又

十月二十四日

台風一過秋が深まります。穂ものは収穫終わりました。

前日、丹波山経由で溪谷から峠を通り塩山に出て帰りました。紅葉はちらほらで、葡萄園黄葉で遠望では水田の刈上げ前と似ています。時に土地を離れた風景も参考になります。

十一月十七日

御子さん御誕生御祝い申し上げます。

いろいろ御心配なされたことと存じます。良き御命名なされました。『遙』山の彼方の幸を求めることとせう。

秋から冬へ一直線なので驚きました。四五日平年に戻りました。収穫が終わりました。霜の早さに忙しい収穫でした。今日始めて雪虫の飛ぶを見ました。短日なので昼は気忙しい夜は長すぎて、暇で読んだり書いたりですが、年齢は根気が続きます。

わざわざ御持参下されましたさつま芋苗、お蔭で沢山穫れました。一部、野鼠に喰われましたが、二人では食べられません。御都合宜敷き折り御出掛け下さい。……………。

昨日は一日盆栽の冬越しにかかって終わりました。

七日、日本観光文化とかのグループ十三名で雑穀を見に来ました。主任賀曾利隆氏、四国稗の餅を試食させました。自動車をロボットで作る時代、山村農は夢の世界で現実性がないことを説きました。変った生活のため時に変った人が訪ずれます。

秋鶴水

鶴水清澄天如鐘

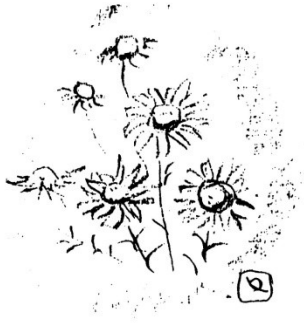
流揺紅葉浮蛭蜒

山寺鐘滔々流送

鶴蔭秋映及相州

……………。菊の秋ですが近頃は年間切花であるので、ひかれません。秋でこそというものが好きです。

秋冷の 木立寂しく 木の実ふる



十一月二十七日

学期末になりますので、御忙しいでせう。次に、遙ちゃんお健やかと存じます。

記録的な早い寒で予定が狂います。これからどんな冬になるやら。

西原で唯一軒の水田作りで、一年がかりの夢だったササニシキを二十三日食べました。美味なものは弱いといふか上品といふか、栽培は面倒で収量は多くありませんでした。今度はゼンプの試食です。

北海道の稗種を譲って下さい。来年は昔の稗飯を忘れぬよう、蒸して昔ながらの稗飯を作り食べ度。私も五十年近く食べてみません。

昨日の雨から休息です。柿の凶作で晩秋から初冬の風景に柿の無いのは淋しい。葉落ちた木に赤い柿は美しいものです。

二十三日午後 馬鈴薯を奨励した恩人中井清太夫代官を祀った甲州薯大明神再建した社を見に、街の立八米(？)に行きました。……………。向寒の節 皆様の御健在をお祈りします。

ガサゴソと 大きな朴の 葉が落ちる

十二月九日

寒さが早い年で予定が狂いました。

お子さんが体の具合が良くない由、どうぞ御大切に。わざわざ京の銘菓御送り下され御厚志御礼申上ます。いつもお心尽しに恐縮致します。二十日頃に御出掛けの様子なので、雑穀の餅を搗きお待ちしていたんですが、お子さんの具合が悪かった故なのだったと思います。無理せず、御都合の良い折りに御出掛けください。奥様にもよろしく。

短日なので一日の労働時間の僅な事、畑仕事なので霜の解けぬうちは始められませんね。漬菜の大根も干葉取り上げ終り、冬ごもりの支度に入ります。

短日の 落日 小豆打ち終る

三日は、知友と丹波山経由で塩山市周辺の古い寺と社を見て一日遊びました。私としては珍しい事でした。閑散としている時期がいいです。果樹地帯も葉が尽て茫漠といふ風景で中耕している老人があり、自分の姿のような気がしました。社への道を尋ねて別れる。

取急ぎ 御礼に添えてあれこれを申上げました。

降矢さんの便りから (2)

昭和六十二年五月十六日

拝復 ご丁寧なるお手紙有難く存じます。雑穀に関する資料誌御礼いたします。山村では僅かな伝承と経験が基本で学理起源は知らないんです。大麥参考になります。

西原は峠を越えねば他所に出られなかった土地で、昔は山を伝い、相武、甲信を通じて生活していたんでせう。

砂漠化するかと思う。雨不足で青いのは麦、馬鈴薯ぐらいで他の作物は枯死又は發芽せず、整地しても立ったままで何処も同じでせう。ですから昔から山村の生活は厳しく準備工夫を重ね、残った雑穀はみんなその中から残ったものだろう。

あの日(注: 5月2日)急いだ為、稗の種は取り落とししました稗もありました。(稗は)保存に一番耐える作物といわれています。十三日夜より慈雨来る。遅れましたが時替えます。 御礼に添えて 敬具

ほどよける しめるもたらす めぐみ雨

五月十七日

拝啓 過日御入来の節は突然の事にて不用意の事にて失礼致しました……。私の処には雑穀の種を求めに訪ずれる方々があります。然し種の保存も年齢の為か限界になりました。山村の手造り農業は崩れてしまいました。

慈雨以来、作り直しや時替えに追われます。七〜十日位遅れましたが、秋に是がどの程度影響しますか？

御礼に添え 敬具

六月十三日

拝啓 雑穀、日照り最中の時付けで無事發芽なされましたか？私のは日照りの被害で満足にいったものはありません。本年は穂もろこし(コーリヤン・高黍)、粟は休みました。普通より早く作った夏蕎麦、実がつきははじめました(十日か十五日早作り霜に遭う)。四国稗を久し振りで苗床を作り移植栽培です。是が本格です。二十日から二十二日に植える予定です。黍は五月のは日照りで發芽不良、六月新しく二回目を作りました。是も四五日続いた高温でどうなる事か、照りでもう二回被害を受けました。異常気象はいつまで続くか。先日の高温は、山野の木草も葉が日焼けしたものがありません。

お暇があったら私の雑穀経過でも見にお出掛け下さい。
放送局から下旬に雑穀の村として来る予定です。大麦もう
刈れます。私は小麦を少し作り置きます。 いづれ又草々

六月二十三日

前略 日照に負けず発芽された御様子ご熱心でした。写
真まで添えての御知らせいたみ入ります。

蕎麦は日照りで発芽が悪かったでしょう。夏蕎麦は七月
中に収穫しますので、小さくとも花が咲くでしょう。黍も
早い作物です。無肥料の方がきつと実は確実に入るでしょ
う。但しともろこしは肥料を與えてください、よくでき
ると食べられますから。他のものは来年の種用でせう、と
思います(注、甲州種ともろこし等の栽培の仕方、とく
に肥料の施し方について尋ねたことへの返事)。

私のともろこしは発芽した処を鳩かくろつぐみに喰わ
れて二回ともやられ、三回目には小豆を作り、甲州種はこれ
から作ります。秋蕎麦は立秋から五六日経った頃より八月
半ばに当ります。只今、コンニャク畑の柴かけ中。僅かに
小麦を作っており、是の刈り上げ等。雨もあります。梅
雨としては雨が少ないですね。

感謝に添えて御一報まで

草々

七月二十九日

昨日は御丁寧な雑穀二信、感激です。御丹精驚き入りま
した。

中途で一部畑の返却は残念です。写真でよく判りました。
私は本年は四国稗と黍、ソバ、ともろこしで他は休み
ました。夏ソバは一般より早く六月から七月は始め収穫で、
黍の出穂中。四国稗は八月半ばでせう。秋ソバは八月半頃
より作ります。又申し上げます。

横浜の新聞より雑穀稗の俳句所望されましたが、突然で
間に合ず、句に挑戦です。コビリは小畫のことで茶うけの
事、書は馬鈴薯、稗は四国稗です。苦しい句です。

御礼を兼ねて 追って又

献涼風 夏の日の コビリは曹 稗の餅

八月十八日

蝉 鳴響強く仲々と存じます。山原は夜に入ると涼
しく秋虫が鳴きます。六月より雨が乏しく凶作しましたが、
十三・十四日の西日大雷雨で畑も十分です。

黍穂揃いして十六日妻と二人で小鳥防除の網を張りまし
た。粟・黍・稗に網を張らないと小鳥の餌になり、収穫皆

無になります。この網張りが老人には大変な仕事で、黍は
照りがちなれど二米近く丈があり苦労しました。黍は連作
を嫌がり五年目位に、粟、四国稗も三年目に作ります。米
麦外の穀物は連作せず、三年に一回がいいようです。甲州
ともろこしは二ヶ所作り、発芽四五割位で鳥にやられ作
直しても駄目で、種を切りました。来年は友人から種を貰
うのです。四国稗は出穂中、八月末か九月四五日迄に穂揃
いです。



秋蕎麦今日十八日作り終る。白菜は苗を作り植えます。

大根もこれより、野沢菜類作りです。午後三回目の大雷雨

お盆は八月で子供も帰省し、盆踊り等。今は静寂なり

近況迄 敬具

八月二十九日

前略 情味溢れた御返信御礼申し上げます。

秋の気配が濃くなり、秋の虫が鳴きます。段々澄で行く
空に蜻蛉が飛ぶ。

高温で台風の被害を受けぬので、日本は稲が豊作、山村
の秋作は豊作。黍に蕎麦は七十五日経ると収穫できといは
れ、稗も早いので山村では救急食糧として古くから栽培さ
れたでせう。稗の中でも四国稗は百三十日位かかり日当た
りの好い場所(畑)でないと涼害の年があります。日照時
間の短い山村は不作の年がよくあり、本年は今後台風もな
く霜が遅れると豊作です。

何年振りかで稲の如く移植栽培した四国稗穂揃いになり
ます。妙なのは照り年なのに作物の草丈が非常に伸びるこ
とです。黍は色づきはじめ、早い人は収穫はじめました。

秋蕎麦は九月上旬中に花が咲くでせう。只今、小豆が花盛
り中です。さつまいも(甘薯)、ともろこしは明治初年

から、馬鈴薯は天保時代か？

お国は山形の由、食用菊の有名な土地、私はやっと三年前苗を入手、秋になるとテンブラ、酢漬で楽しんでます。酒は不要な男ですから、菊酒はたしなまず。

乱筆にてお礼を いづれ又

草々

十月六日

月見が来ました。山村は新米の団子も作らず、里芋とさつま芋と栗飯です。

五日に四国稗の収穫で、黍は既に乾して貯蔵、私の雑穀収穫は秋蕎麦と豆類です。蕎麦も花が終りに近づきました。四国稗は大豊作です。只今小豆の収穫で、それに乾草と乾柴刈り（かりぼし）。来春コンニャクに敷くのです。草は落葉を加え堆肥作りですね。

平年霜は今月の下旬頃で、本年は早いか遅れるか、紅葉もそれに左右されます。芋類はその頃より掘り上げです。

先日ある雅友に戯作の詩を

雲居の山畑へ日毎通へり 断崖の泉樋より落る音寂なり
吾耕して天に到達を望願す 秋風は四国稗の穂を揺ぶる

御健斗をお祈りして

草々 敬具

十月十五日

拝復 御健斗とおよろこび申します。

文化の日頃、仲間達と御入来の望をたてている御様子、その頃は紅葉が美しいと思います。お繰合せして御入来ください。

畑の雑穀、収穫が終了した時期です。只今、小豆・大豆の取り上げで、秋蕎麦の収穫今月中に終るでせう。私は収穫と刈干刈です。

出無精の私が珍しく県の美術館を見に行つて来ました。

ミレーの作品で有名です。久しい間の望でした。

先日、霧の中より雁の渡る声を聞きました。

初雁が 小豆はんでる たそがれる

三日は西原地区の文化祭で、句、盆栽等、毎年出品です。

草々

十一月二日

菊の華や 初鮭うれしく 山居かな

さて近日御入来のご予定は延期されましたか。

若い人達はこの激しい時代ほんとに忙しいことと推察致します。

本年は当地は珍しく十月中に霜が無く、平年は三回はあるんです。その為、紅葉は遅れ、反対に菊の開花は早かったです。雑穀の里へ夏から訪れる人達が増えました。収穫は終了です。御礼に添え近況を加えました。 敬具

十一月四日

三日一日だけの天気でした。貴重な一日を御来訪下さり申訳なしでした。……………。雑穀の成績わざわざ御持参、その誠実に頭がさがりました。栽培上で質問がありましたら、お答えできると思います。

農業の方は誰にも負けませんが、三年前より体が老化し、田を蚕をやめて僅かに雑穀と野菜を運動代わりに作るだけになりました。然し説明のみで足腰が弱り実施は不可能になりました。雑穀を沢山作り健康食に売出そうとする案がありますが、手造り栽培非常に労力が必要で、どうなりま

すか。 天気が定まり脱穀終えたら秋蕎麦や食べるかどうか、小豆を送りませう。

今日はげしい雨で、雨日は読書や句作で頭の運動です。



然し視力が弱ってきたことは残念です。老人ですが過去を樂します、前進で夢を追いたい。それは苦しくも人間の生きるといふことでせう。

昨日は文化祭へ行かずに行きましたら、菊の新品種か花の広き牡丹のような菊を一鉢戴きました。出品した菊でせう。私も農作物・句・盆栽を出品しています。今年も用意はしましたが、見送りでした。

蜂に刺されたのも快癒です。暇ですからペンを執りました。

……………(中略)……………

紅葉しない山里は風情なし。この雨では黒く腐って落ちるかも知れない。いづれ又

十一月 日

木枯が吹き、霜が来て、やっと平年並みの風景になりました。晴日が戻り、畑に吊して置いた蕎麦や小豆がカラカラに乾いたので、脱穀できました。

蕎麦は秋蒔（秋ソバ）で、西原地区では立秋が来て四五日頃より作ります。小豆も秋蒔で、西原では秋ソバより一ヶ月早く、七月五日頃より作ります。

小豆は食べてください。必要がなかったら、入用の方へあげてください。五日ほど前、自然生いたけを偶然採ってきました。油をひいたヒライパンで焼き、醤油をかけて食べるが好いです。

寒くなりました。皆々同志の方々にも御健在を祈ります。

十一月二十五日

前略 木枯に落葉の雨です。急に本格の寒さになりました。本日は故郷からの珍果、わざわざの御恵顧に心より御礼申し上げます。カリンは咳によろしい由ですので薬用に作りませう。キウイの方は熟す日を楽しんでいます。

北国は猛烈な寒さと雪のたより、関東は楽土です。でも西原は水を見、朝は霜で真白ですが、平年よりは十日く十五日遅れました。寒いと持病の痛風で、足腰が病めた老

人はだめです。でも日中は春に備えて畑の冬耕で、僅かな蒟蒻薯の掘り上げが残っています。勤労感謝の日も好天気なので、山畑の冬耕でした。それが健康には好いようです。農人の信念かも知れません。

皆々様御機嫌よう 御礼に添えて 近況まで

敬具

十二月八日

拝啓 初雪には珍しい積雪で十センチで、平年より半月早い雪です。御健勝と存じます。師走上旬よりこの寒には面喰いました。雪の降る予報で大根、さつま芋等を取り入れました。蒟蒻も残っていますが、安値なので中止です。雪が消え年内に暖な日があったら畑の冬耕です。

春に備えての仕事で、このまま寒いと畑が凍りますので山の仕事です。南西の山で日を楽しむが晴日でない日は炬燵に籠ります。老人は寒いとだめです。まだ天気が悪いので雪が一杯です。南面の雪はすぐ消えますが、北面はどうぶん残るでせう。

栃餅や 山家しぐれの 炉端かな

昭和六十三年一月一日

かべに掛く 黍のたね穂に 初日さし

一月十一日

寒中お見舞い申し上げます

良き年をお迎えなされたと存じます。旧年十二月前半は二回の雪と寒さでお正月を先どりした有様でしたが、後半は暖冬で、正月五日迄、畑の冬耕で春に備えました。

六日雪より寒く、私の正月で休業冬籠りです。

暇なので干柿を少しお送りします。山形の郷里は柿の産地ですが、当方の柿は百匁柿ですが、暖冬で乾かすいたんだ中より少し選びました。寒波が来てやっと乾きました。御笑味ください。

次に、一月十九日（火）午後七時よりTBSテレビ「そこが知りたい」に山村西原も加えられ放送されます。ご覧ください。

いずれ又、これから日中は日を楽しんで南面に過します。御機嫌よう

（十一月二十八の雨日、友人宅で栃餅を戴いて）子供の頃食べた栃餅七十年振りでした。

お正月はふる里へご帰省でせうね。私も在京の子供が正月は帰ります。

年尾ご忙殺の折り御機嫌よう 雪に退屈して 敬具



一月二十七日

小寒や 石の地藏尊 さむそうな

暖冬とはいえず、最近では寒波がときどき来て寒くなりま
した。

皆様並ご同僚の方々御健やかと存じます。

老生一月二十日迄畑仕事でした。例年は十二月一杯で終
了でした。それは地が凍るからで、今年は二十日迄持ちま
した。盆梅が咲きました。全く変わった時代です。

只今は冬籠り、でもどこも雪で寒いので、日中は山に行
き南面の日向のくぼみに日を楽しみ、帰りに乾柴を背負っ
て来ます。是は蒟蒻が發芽したら敷く為のものです。

正月帰省した子供は、親爺の生活は今の世では最高だと
いう。聞いてみると心身をすり減し廃人になって行く同僚
もあるといふ、はげしい時代のようです。雪が積もらない
うちは、体調を崩したり老齢化を防ぐために日中は働きた
い。寒いと炬燵で読んだり眠ったり私の一番暇な時期です。
夏から雑穀の句へ努めています。まとまりません。西
原は雑穀の里として知られてきました。テレビで取上げた
ことが動機でせう。

節分が近づきましたが、寒さはこれからかも知れません。

三月四日

雪ならば 壁の種穂へ 鳥が来る

待望の雪が降りましたが、降ると流石にうんざりです。
積雪十五センチ、翌日は雲が多かったが半ば解けましたが、
又下り坂の天気です。

三月は年度末で忙殺なされてと存じます。痛畏の節、皆
様お健やかですか。

私は逆に、三月は半より温和な気象なれば本年の年度は
じまりで、畑に立ち野菜作りはしめです。然し三月は雨、
雪が続きます。結局は四月が新年度でせう。科学の進
歩し産業革命は厳しい。私などは農を語る資格もなくなり
ました。消えようとする雑穀の種をせめて次代に残そうと
して、同志に呼びかけています。

一方、次代の常識にもかける老人で、小学校で少し習っ
ただけの世界地図の勉強です。カルガリーを見つけたら。
アフガニスタン、パキスタンと紛争国を探したり、寒い時
期これも結構趣味には、老人にはよいですね。

遺蹟、埋蔵文化関係が何処も盛で、古代史が今にはっき
りなるでせう。暇になるといろいろ学びたいものが一杯で
す。一度、高幡不動・百草園・遺跡庭園・調布深大寺など

四月八日

花までど 奥郡内は 雪である

一春は九十日、その三分の一が過ぎやうと春らしさを感じ
たら、又大雪です。

お変わり皆様ありませんか。農は追いつめられ行く時代
気象にまでそむかれます。

馬鈴薯を作り、春時の菜類と蒔き葱を植えました。五月
になれば雑穀類です。晩霜も心配です。

四月は出發で忙しいですね。三日迎えに来たので昭島に
住む長女の処へ盆栽の植替に行き、二泊して帰りました。
この三年、花粉症で眼が悪く閉口です。ご健闘お祈りして

四月十六日

拝復 春らしくなりましたが低温がつづき、十日は遅れ
ています。不順の象候で、晩霜がつづき作物の蒔ことも作
ることも急げません。

五月はいろんな先生方が探訪下さる御様子、有難いこと
ですが、家庭の都合上、雑穀をご馳走することが出来ぬが
残念。現在は雑穀を一年も長く栽培して貰うこと、大勢に
理解して戴き栽培して貰うことを願っています。

探訪したいところがたくさんあるんですが、足腰が弱くな
ると、だめです。約三十年前、胆のう欠除で、以来食の好
みが変わり、皮膚が弱く、杉一杯の土地に生存しているのに
ここ二三年花粉症にかかり閉口しています。

雪日以来、雨・小雪で家居で筆を執りました。いづれ又

三月十日

拝復 …………… 五月半、ご来遊の予定の由、

連休中は混雑で丁度良い時期と存じます。小さな土地で何
も得る所はないでせうが水と空気は一級でせう。その頃は
筒でもお土産に上げられませう。

彼岸が近づきます。彼岸が起点で農耕がぼつぼつ開始で
す。次は八十八夜中心です。珍しい暖冬梅も例年より早く
開花はじめ、ここになり足踏みです。彼岸頃は鶯が鳴き出
します。寒波が去れば日脚が伸びているので気温が上が
り、忽ち本格の春でせうが。

草々

春寒し 爆撃忌きし 世のさかえ

(三月十日は都の爆撃されし日)

老齢ですから毎年全部の雑穀を作ることは無理で隔年で作ったり、休む年は友人に作って戴いたりしている次第で、種保存の為の栽培で小面積に作ります。

雑穀は食べる迄に非常に手数のかかることが缺点です。特に稗が厄介です。西原では雑穀は五月八十八夜頃より作るものが大部分です。都合によれば、夏に印度から研究者が視察に来るかも知れません。

十六日雨にて、早速御返信迄

五月十一日

連休も誠実なご生活の御様子、老生は半分遊び、半分仕事でした。時期的に農耕は忙しいものですから。

西原探訪の先生達（注、筑波大学西田正規氏等との研究会「寄り合い」三周年を記念して計画した雑穀ツアー。総勢三十二名が五月十四日に三頭山荘に投宿し、降矢さんと脇坂芳野さんから話を伺う）はどんな事を知りたいのか、何を尋ねたいのか？。何とか添えたら役に立ちたいと思います。

珍しい遅霜で低地の畑は被害が大きいです。異常な天候で高温と低温が前後したり、乾燥が強く作物の発芽は悪く、閉口です。

今月半に、NHKから山峡の里の青葉の風物と雑穀作りを撮り来るとか（私は関係ありません）。

雑穀がバカに人気です。いずれ御来駕の折り畑を見てください。

葉桜や つばめの来る日になって

五月十六日

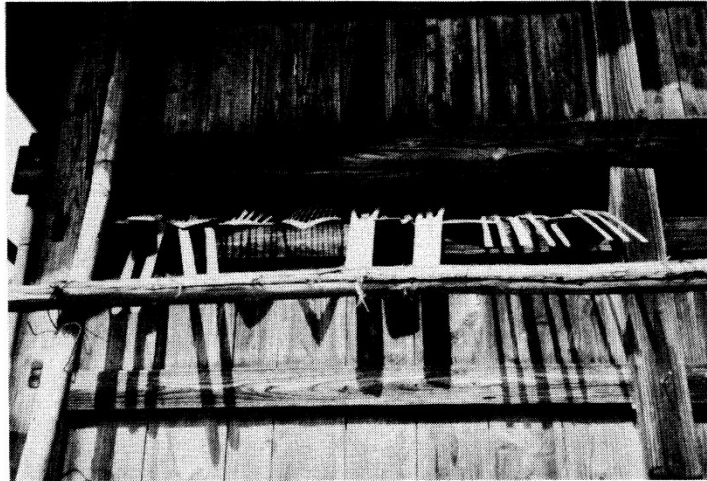
行く春へ 雉鳴くなり 人恋し

お疲れと申します。主催って大変な事ですね。皆満足らしく何よりでした。青葉と清流、きっと何か心に残ったものと思います。

お土産沢山戴きいたみ入ります。厚く御礼申し上げます。雑穀も作る時期で、秋十月半頃でしたら収穫期です。少し乾燥の強さと霜害で発芽も悪く、どんな生育振りか不安です。まだ粟ととうもろこしをこれから作ります。月末か六月早々に茶摘みです。………………。私も若がえった様な一日でした。

取急ぎ御礼まで

草々



板倉に架けられた農耕具

安孫子昭二

私をはじめ西原を訪れ、降矢さんの知遇を得るようになったのは、昭和六十二年の五月初旬であった。あれから十年が過ぎたが、この間に降矢さんから頂戴した書簡は、平成九年末現在で実に三百五十四通に達している。毎年三十数通ずつ頂戴してきたもので、几帳面で筆まめな降矢さんが記された、雑穀をはじめとする作物の栽培方法と生育状況、平年の気象との比較、農の情景、あるいは村の行事などいろいろの分野にわたっている。長年にわたり集積されたこれらの書簡となると、いまや西原の歴史・民俗・文化・自然を語る貴重な史料である。そして、便りには大抵感性豊かな視点で詠まれた俳句が添えられている。

西原で生まれ育った降矢さんは、自らの生を支えてくれた食文化の、ことに雑穀の命脈が途絶えようとしている現代に悼さすように、いまもアフリカやインド亜大陸で食料としているこれらアワ、キビ、ヒエ等の起源と日本への伝播経路に知的好奇心を燃やし、西原の大地と民族の食文化

を通しての連帯意識を共有したいと考えている。トウジンビエの濁いた味に、アフリカの大地に住む人々に想いを馳せる。

降矢さんは、優れた科学者の眼で作物の生育状況を観察し、逐一記録するとともに、創意工夫を怠らない。一面ではその経緯と成果を解読し、物事の真理の神髄を追求する。たとえば、新品種の栽培を試みようとするとき、一年目はその種子が早生か晩生か判らないので植木鉢に蒔いて発芽から出穂、結実などの期間を克明に観察し、二年目にその観察を基に種蒔き期日を推定して畑に作って確認し、さらに三年目にそれを微調整して収穫に導く、という篤農の人である。こうして念願の「桃太郎の黍団子」を味わうことができたし、紅花の栽培たるや本場山形よりも地味が合うのではと思わせる上出来で、自分で摘んだ紅花茶を愛飲し、紅花の朱肉を作りたいという。

木俣さんは、私より十年前の昭和五十一年から研究のフィールドを西原に求めて、雑穀の栽培や食べかたをつぶさに観察してこられた。特に降矢さんからの聴取り調査を通して、降矢さんの生き方につよく共感するものがあつたようである。木俣さんの研究と、忘れ去られようとする山村

の農業の実態を記録に止め置いて貰いたい降矢さんの阿吽の呼吸が一致したことで、双方のやりとりには真剣勝負の趣がある。降矢さんの便りで気がついたことだが、なぜか木俣さんが降矢さんに会いに出掛けた多くは、暮れから三月までに集中している。普通なら寒さ酷しい冬季を避けるべきであろうが、木俣さんの大学の休暇の都合なのか思っただけのところ、春から秋にかけては降矢さんが農作業に忙殺されていて、とても邪魔できる雰囲気になかったのだという。

降矢さんは、水田、養蚕のほかにも馬鈴薯、大麦、蒟蒻薯、茶、雑穀等を並行して作っていたから、例年五月から七月の頃ともなれば、それこそ「蚕上りや まなこくぼみつ髯ののび」という体調だったようだ。超過激な労働を、実に七十六歳までも続けたというから、信じられないような気力と体力である。

そんな降矢さんが水田と養蚕から撤退して、作物の主体を雑穀に切り換えたのが昭和六十年。多少とも時間を融通して貰えるようになった頃であったから、私にとつては雑穀作りに師事する絶好の機会で、きわめて時宜を得た巡り合わせであった。

私が西原につてを求めるようになったのは、次のような

経緯である。

昭和六十年に建設された東京都埋蔵文化財センターの一角には、遺跡庭園「縄文の村」が併設されているが、この一角にささやかな「雑穀畑」を作りたいと考えたことによる。私は何も、アワ・キビ・ヒエ・ソバ等が縄文時代に本当にこのような形で栽培されていたかどうかという論議を、正面きってしようというのが趣旨ではない。いまの人はアワ・キビ・ヒエ・ソバを言葉で知っていても、どういう植物でどんな花が咲いたり穂が出たりするのかは、図鑑だけが頼りである。いまではすっかり宅地化されて命脈が途絶えてしまったが、古来、この多摩地域でもこれら作物が祖先から宮々として受け継がれてきた、重要な食料であったことを知ってほしい。また、せめて一株なりともそうした雑穀を教材見本として栽培することで、遺跡庭園を訪れる見学者に心の潤いが得られたら、それに超したことはないであろう。

しかしその肝心の雑穀の種を、何処から、どうやって入手したものか、しばし手を拱いていたのである。そうした折りにたまたま出会ったのが、日本観光文化研究所の旅と民俗「あるく・みる・まぐ」シリーズの、賀曾利隆さん執筆による「西原特集号」であった。一読するや、矢も楯も

なく私の心を西原へと駆り立てた。東京のすぐ裏手に、こんな雑穀の村が存在するということの驚きと、村の人々の人情の深さが叙情的に綴られていたから、とにかく行って話を聞いて貰い、誰かに雑穀の種をわけて貰いたいという想いで、同僚の宮崎博氏を誘って出掛けたのであった。ずいぶんと無鉄砲なことではあったが、ちょうど雑穀の種時きどきでもあり、時季を逃せばまた一年待たねばならなかっただろう。

いまでは中央高速道路に上野原インターチェンジができたので二時間あれば西原に着くが、このときは連休初日とあって高速道路も甲州街道もひどい渋滞で難儀した。ともかく八時に発って着いたのは十二時、梅ヶ枝食堂を見つけたときは、漸く雑穀の村に着いたの感慨であった。梅ヶ枝食堂とは村に一軒の食堂で、賀曾利さんが「雑穀の詩」の作者として紹介した脇坂芳野さんが経営する店である。私達は、ここを手掛かりに雑穀の種の入手をはかる考えであった。持参した「西原特集号」の効果もあって、娘さんの連絡ですぐ近所から脇坂さんが駆けつけてくれた。事の次第を聞いてもらったところ、それなら降矢さんがよいだろうということ、降矢さん宅に案内していただいた。

降矢さんは不躰な初対面を厭わずに私達の来意にうなず

に魅せられて、やがて金子さんと滝川さん達を誘っての西原詣が病み付きになっていった。

降矢さんから頂戴してきた書簡は私ひとりだけではなく、木俣さんも、そして金子さん・滝川さんも、申し合わせたように欠かさず保管してきたのである。筆まめな降矢さんには私共のほかにも何人か文通仲間が居って、折りにふれば筆を執り便りを認めてきたから、その数たるや相当なものに違いない。

そうした降矢さんから頂戴した、私ども四人の便りの文面を総合して、この二十年におよぶ降矢さんを中心とする動向をまとめてみた(付表①・②)。すると、昭和六十年を境にして、それまで営んできた水田稲作・養蚕をはじめ馬鈴薯、蒟蒻、大麦が中心の作付けから、雑穀の栽培に転換したことがわかる。この過激な農作業を、よくも一人で切り回してきたものと感嘆せずにはおられない。

それもこれも、岳父を若くして亡くされ、戦争に召集されてる間に自宅が類焼したために、復員してから裸一貫で再出発しなければならなかったこと、三人の御子息をそろって大学に進ませるために、換金作物の栽培と養蚕を中心にしゃにむに働き続けたことであった。

いて、幾多の雑穀の種を分けてくださった。縁側に腰を下ろして奥さんの入れてくださった茶をすすりながら、降矢さんの含蓄ある雑穀の話に耳を傾けながら、ふと居間をみると世界文学全集などがあつたりして、どうもただの農家のじいさんと違って何かわけ知りなのである。

それはともかく、脇坂さん、降矢さんのご好意により念願の雑穀の種子が手にはいったので、さっそく遺跡庭園の一角を開墾し、種を蒔いたことであった。そして先日唐突な訪問の非礼と雑穀の種を頂いたことへのお礼、遺跡庭園に種子を蒔いたことなどを書き連ねた礼状を差し上げたところ、これに倍する丁寧な返事を頂戴した。その降矢さんの便りの文面は、達筆な筆書きで作物の生育状況や天候のことなどが記され、俳句が添えられていた。私も庭園に蒔いた雑穀が発芽しうまく育ってきたから写真を添えて報告すると、今度はこれに倍する季節の移り変わりや農作業の様子など、適切な文面の便りをつぎつぎに頂戴するようになった。降矢さんの便りときたら通り一遍の挨拶に収まらない、西原の山村農の神髄を伝える魅力ある文面であったから、別途保管して置く必要があることを感受させるものであった。

私は、西原の自然や村の佇まい、そして降矢さんの人柄の便りから西原の年間の農作業と、俳句に詠まれた季節などから四季の移ろい等を抽出し、構成してみた。

しかし、この内容をもっと直截的かつ具体的に物語っているのは、降矢さんの便りである。すべての便りを掲載するのも憚られるので、ここに降矢さんの了解を得て、その一部、木俣さんへの便り(昭和五十六年) および安孫子への便り(昭和六十二年〜六十三年)を掲載することにした。この文面から、降矢さんの農に対する信念や考え方、人となりとともに、西原の社会情勢の変化がご理解いただけるものと思う。

なお、ここには収載しないが、四人が頂戴してきた降矢さんからの膨大な書簡には、この二十二年間の農作業の内容をはじめ、野の花や植物に見る季節の移ろい、雑穀等に対する観察と哲学、西原の食生活、戦争体験、はては西原を襲った台風被害の状況といった、さまざまな内容がある。これを項目別にして抜き書きすると、豊かな山村の生活誌を物語る珠玉の随筆になる。いま、本書の続編として、その編集作業に着手しているところである。

(東京都埋蔵文化財センター調査研究部)

西原の主な文献

- 上野原町誌編纂委員会 1988『上野原町誌』上・中・下
木俣美樹男他 1978「雑穀のむら とくに雑穀の栽培と調理について」季刊
人類学 9-4
木俣美樹男他 1982「雑穀のむら とくに雑穀の栽培・調理の残存分布およ
びその要因について」季刊人類学 13-2
高松圭吉・賀曾利隆 1982『食べものの習俗』日本人の生活と文化9 ぎょ
うせい
賀曾利隆 1986『甲武国境の山村・西原に「食」を訪ねて』あるく・みる・
きく136 近畿日本ツーリスト
坂本寧男 1988『雑穀のきた道』NHKブックス 546 日本放送出版協会
小川久美子 1990「雑穀食がいまも息づく上野原村」『雑穀』農文協

降矢さんを囲む会

- 木俣美樹男 〒184-0011 東京都小金井市東町4-11-4
安孫子昭二 〒191-0016 東京都日野市神明2-14-1
グリーンコープ日野1-105
金子 愛々 〒191-0033 東京都日野市百草988-13
滝川 照子 〒193-0841 東京都八王子市裏高尾町391-3
メゾン・プラム202
-

甲武境の村・西原に生きて

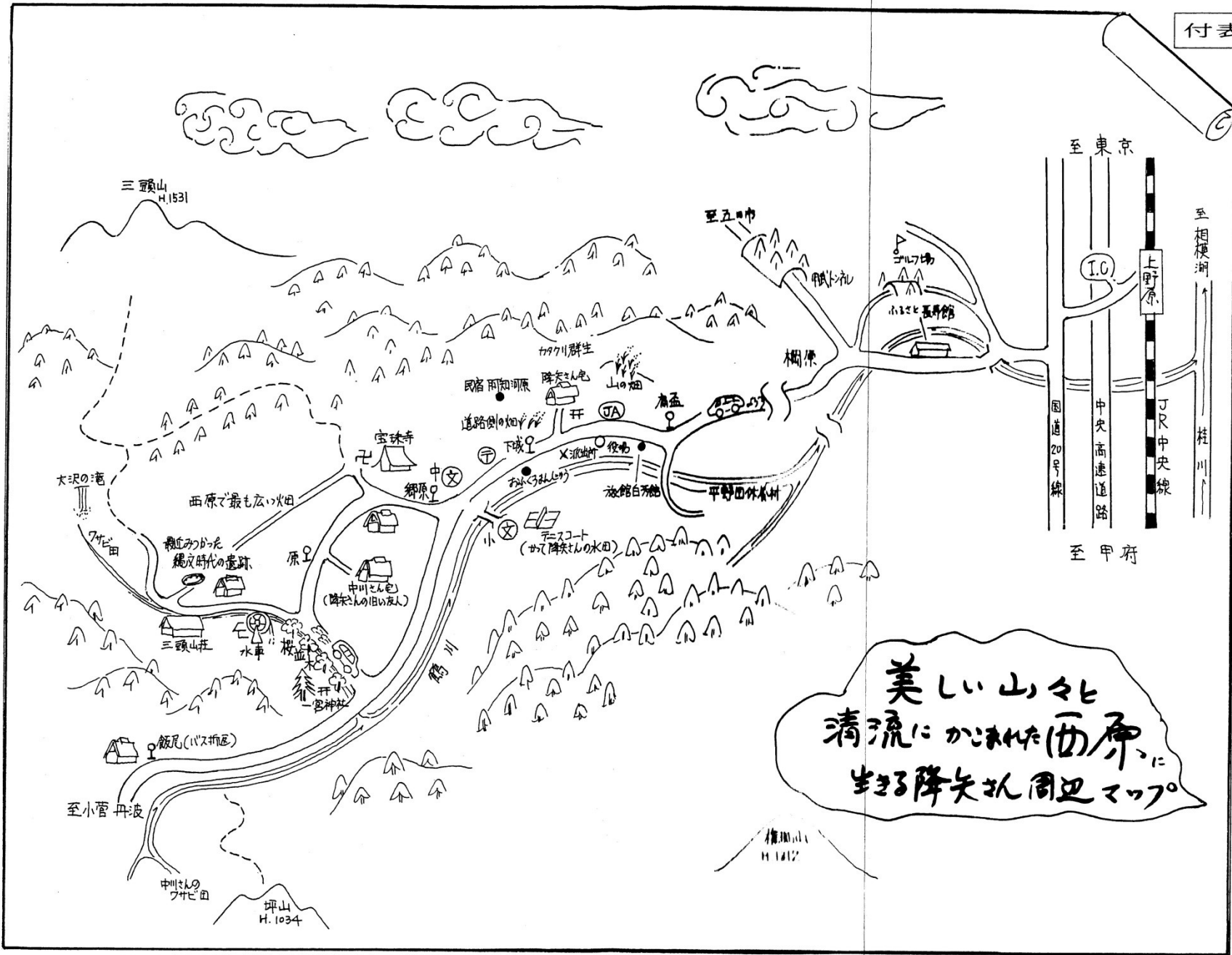
降矢静夫 俳句集 雪野 三良

発行日 平成10年8月31日

発行 降矢さんを囲む会

印刷

(非売品)



美しい山々
清流にかまけた西原に
生きる降矢次周辺マップ

降矢静夫・略年譜(1)

付表2

	昭51 1976 (66歳)	昭52 1977 (67歳)	昭53 1978 (68歳)	昭54 1979 (69歳)	昭55 1980 (70歳)	昭56 1981 (71歳)	昭57 1982 (72歳)	昭58 1983 (73歳)	昭59 1984 (74歳)	昭60 1985 (75歳)	昭61 1986 (76歳)	昭62 1987 (77歳)	昭63 1988 (78歳)
天候	冷害の秋	暖冬 夏の長雨で凶作	旱魃	冷害 空梅雨			台風 冷夏で作物被害	雨台風で被害	雪4月まで			春 雨不足	冷夏
農作物			養蚕 畑不作だが水稲は豊作	山村の農は亡びた		さつま薯	北海道の稗試作に成功	ネパール土産の杉		この年で米・蚕止める	吾亦紅種購入し栽培 馬鈴薯の試作 ゼンブの試作	麦作この年で止める	稗モロコシの試作を再開
主なことから	10 木侯はじめて西原へ・降矢との出会い	2 4 木侯の選考運動で問 木侯の西原訪問 木侯の西原訪問 木侯の西原訪問	11 木侯の選考運動で問 田畑荒れる 敬男参議院に当選 小菅村長作を調査	1 3 風害で氏神様の社殿が崩壊 木侯の西原訪問	2 3 木侯の西原訪問	1 2 3 木侯の西原訪問・飯尾の火事で四棟全焼 漢詩の試作はじめる	11 賀曾利はじめて西原へ・降矢と出会う 2 3 町の文芸誌に随筆を	9 木侯の西原訪問 1 2 3 木侯の西原訪問 1 2 3 木侯の西原訪問 1 2 3 木侯の西原訪問	9 11 京都から小林さん雑草の研究で来る 木侯一家の訪問	木侯海外研究 空虚で読むも書くも嫌になる 妻の入院	5 安孫子初めて西原へ降矢さんに出会う 木侯米国農場を視察	8 11 安孫子雑穀の試作品を持参再訪 木侯インドへ研修 12月まで	10 木侯・インドの雑穀研究者を西原案内 安孫子西原訪問 自宅の道路寸断する 改修に着手 5 寄り合いの研究会が西原訪問
備考	ロッキード事件 モントリオール五輪	有珠山噴火 日航機 ハイジャック	初の試験管 成田空港開港 ベビー	共通一次試験 東京サミット 開始	金属パペット 殺人事件	ポロランド 戒厳令 シャトル事故 スペース	ホテルニュー 火災 代表制	アキノ暗殺 参院選比例	グリコ森永事件 ロス五輪	筑波博 日航ジャンボ機落	チェリノブイリ事故 三原山噴火	国鉄分割民営化	ソウル五輪 消費税導入 青函トンネル開通

降矢静夫・略年譜(2)

	平元 1989 (79歳)	平2 1990 (80歳)	平3 1991 (81歳)	平4 1992 (82歳)	平5 1993 (83歳)	平6 1994 (84歳)	平7 1995 (85歳)	平8 1996 (86歳)	平9 1997 (87歳)	平10 1998 (88歳)		
天候	冷多 夏雨	台風襲来つづく	台風で網原―沢渡間	暖春 冬多雨	記録的な冷夏	春記録的な猛暑日照 秋口から長雨	春日照不足の猛暑 異常気候	猪雀大群が出没が雑穀を	春の到来遅く	日照の夏 空梅雨模様	一月の大雪 春の訪れ早く	
農作物	ネパ・梗キソバを試作	紅花を試作	ネパールソバを試作	日照不足と低温で	玉葱・アスパラを試作	宿根ソバを試作		クワイを試作	クワイの花咲く 久しぶり小麦を作る			
主なことから	45 結婚 50 孫西原記念問 11 安孫子・金子・鈴木昇と西原訪問 11 木俣・第二回雑穀全国研究会の開催	1 坂道が転で腕を脱白 4 櫻太が打合せ 6 キ太が打合せ 7 芋煮会 9 次郎が泊る 10 中川園で松原の河原で芋煮会	1 暮退院に立病に三十年振り入院 3 白内川眼の手術 5 左川金傷の間 5 左眼で失明 8 12号台で中川園の山田へ	4 中肉に足腰痛む 5 俳句の師に入院 10 椎の実を土産に試食 12 ネパールソバを西原訪問	4 中川園を焼腕に及ぶ・視力衰える 5 中川園を見舞う 8 トウジンヒエ上出来・写真撮影 11 西原訪問	2 天皇疏黄島へ戦争の時 3 賀曾利村女史の苦難を懐古 4 安孫子宿根の歴史を参事 5 賀曾利村女史の歴史を参事 8 トウジンヒエの穂揃いを撮影 10 宿根ソバの見学・中川夫人の逝去	1 長寿館に穂モロコシ・糯キビを初出荷 4 西原訪問 5 金子さんまた入院 5 中川園に糯モロコシ粉を初出荷	8 トウジンヒエの穂揃いを撮影 11 降矢さんを東京に招いて懇談	4 安藤正・皇后の長寿館にデビューを受ける 9 木俣インドに留学→9年6月まで	6 木俣インドから帰国 8 安孫子・金子・滝川が訪問	1 賀曾利夫妻が訪問 4 このあ夫人が逝去	
備考	昭消費税導入開始 天安門事件 宮崎勤事件	バブル崩壊 東西ドイツ統一	都庁新宿に移転 雲仙普賢岳噴火	ソ連邦消滅 湾岸戦争	佐川急便事件 バルセロナ五輪	クリントン大統領 奥尻島地震被災	凶作・米輸入 連立政権が発足	阪神大震災 オウム事件 青島都知事に	住専処理問題化 沖繩基地騒動	0 157 事件 アトラクタ五輪 人質事件発生 大使館	神戸児童殺傷事件 ダイアナ事故死 長野新幹線開通	日銀総裁の更迭 長野冬季五輪

付表 4

降矢静夫・農の歳時記

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
農 作 業	(昭和60年の頃まで) 竹伐り	杉下刈り		植林	水田苗代	田植え 春蚕	上簇 繭出荷	初秋蚕 杉下刈り	晩秋蚕 繭出荷	繭刈上げ 繭出荷		脱穀	
	冬肥 乾落柴葉 刈集りめ	一年で暇なとき	蕪の臺 農作業この頃から始める	葱植え 盆栽植替	芽出し	苺摘み 雑穀の播種 花咲く	夏大豆の播種 収穫	秋作馬鈴薯 南瓜 小豆の播種	トウモロコシの出穂 防鳥網作り	アワモロコシの収穫 枝豆の収穫	馬鈴薯の収穫 乾草刈り	大根の掘り上げ 堆肥作り	冬耕
西原の四季	紅梅 春一番 みそさざい初鳴き	まんさく 赤蛙騒ぐ	梅 かたぶくり桜 河鹿鳴く	梅 すもも つなずな 桜	晩霜 藤若葉 吹の花 燕くる頃	梅雨 山法師 卯野のばら 桑の実	梅 赤紫蘇 山陽花 合歓の花 山百合	葵の花 虎杖の花 秋虫鳴く	ほおずき 蜻蛉飛び交う	秋海棠 草の実	木枯し 雁の渡り こおろぎ 蟬の鳴り音	紅葉 茶の花に蜂 雪虫舞う	初霜 雪柱 日 鳥喰柿
節 気・ 行 事	小寒 大寒 小正月 粟種門神	春分 雨水	啓蟄 春分 彼岸	清明 穀雨 花見	立夏 小満	芒種 夏至	小暑 大暑	立秋 処暑 盆	白露 秋分 月見 秋祭り	寒露 降霜 敬老会 運動会	立冬 小雪	大雪 冬至	



自宅前の竹林で (平成元年5月)



若いときに植えた自慢の桜 (平成6年4月)



アワ畑の防鳥網を張るのが一苦勞 (平成9年10月)

トウジンビエの試作に成功 (平成6年8月)



「門男」を背景にこのゑ夫人と
(昭和56年3月)



「光客農夫の像」
笹村草家人 昭和38年制作

農作業はいつも一緒 (平成8年9月)



最後になった記念撮影
(平成9年8月)





原より下城方面を
望む西原の景観



八王子市堀之内の鈴木昇さんを訪問（平成7年11月）



小学校前からの畏友中川勇さんと
（平成5年5月）



三頭山荘の「寄り合い」研究会に脇坂若野さんと（昭和63年5月）



木俣と埋蔵文化財センターの庭園で
（平成7年11月）



安孫子と道路側の畑で
（平成元年8月）



金子・滝川と道路側の畑で
（平成9年8月）



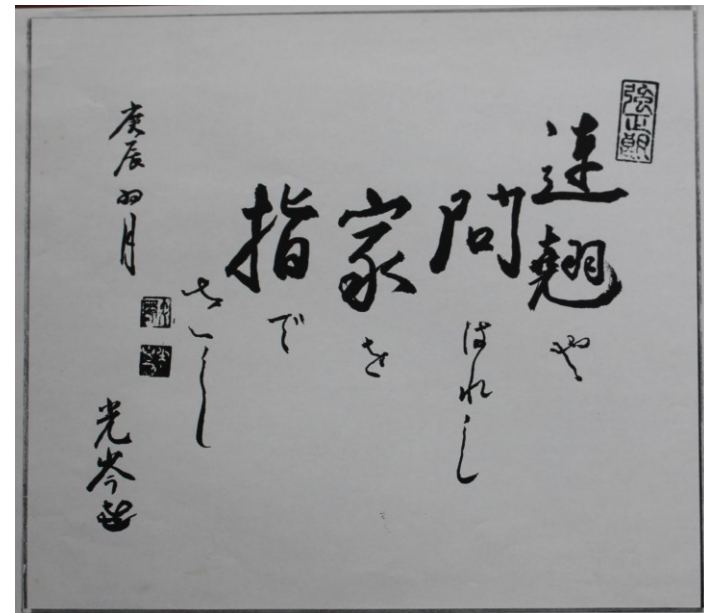
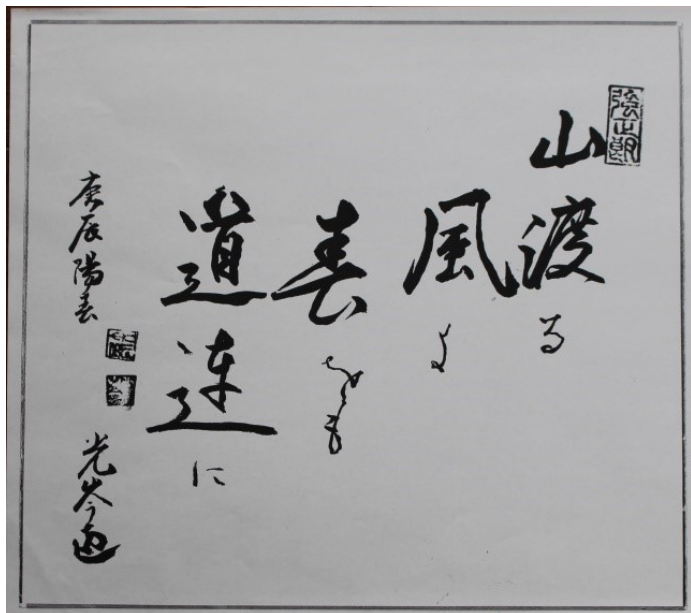
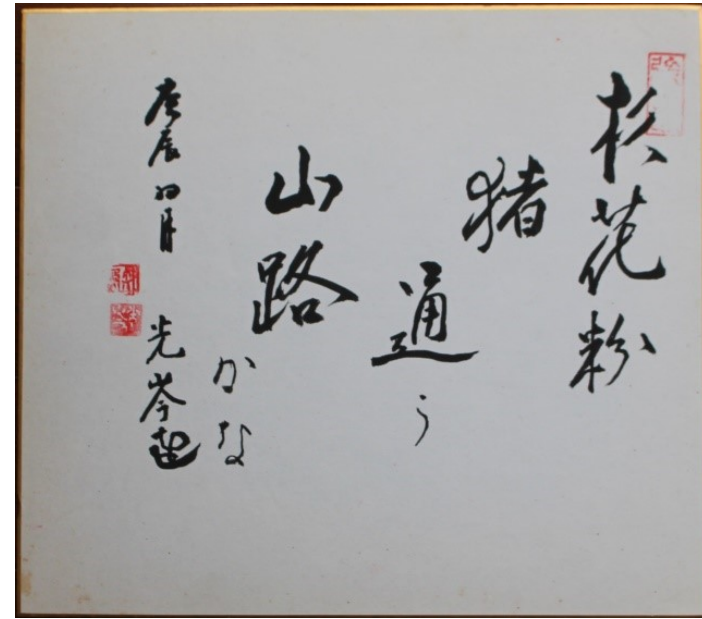
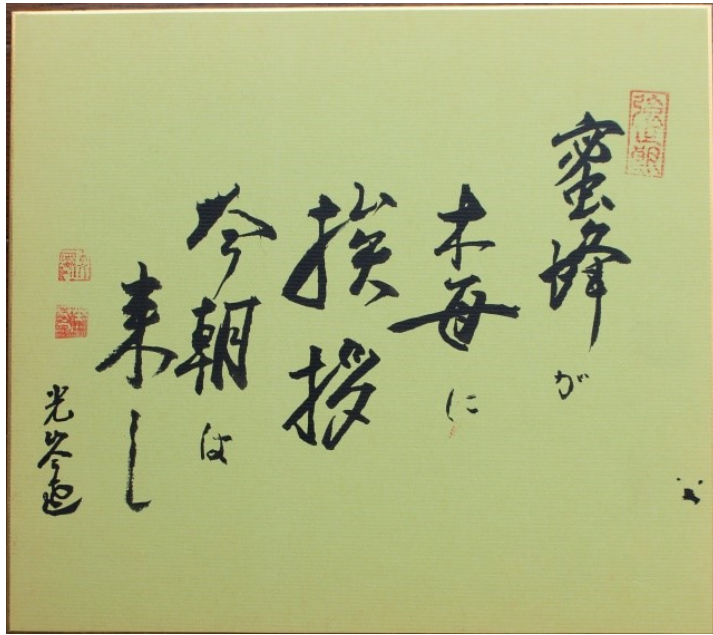
賀曾利隆・中込卓男さんも加わって歓迎会（平成7年11月）



板倉に架けられた農耕具



降矢さんが日々仰ぎみてきた向かいの山



1990年に書かれた色紙